|定義| KをCの部分体とし, deCとする、 dかK上作図可能であるとは、Kの元たなから出発に、加減垂除と 平方根を取る操作を有限回くりかしてめが得られることだと定める。 □ 例 12 ヤナル=エJT ヤ 1+15 は Q上作回可能である。 √元 はQ(元)上作図可能である a,b,ceKのとき、ax2+bx+c=0の解はK上作図可能である 正の整数 n に対して、 $S_n = e^{2\pi i \hbar}$ とおく、 1の原始 n 乗扱 の1つ

問題3-11 ろが Q上作図可能なことを示せ、 □

ビント W=35とかく、2次が経式の解と俘ੱ数の関係を使う。 $d = \omega + \omega^4$, $\beta = \omega^3 + \omega^3 \times \pi^3 \times \pi^3$ $W + W^4 = d$, $W \cdot W^4 = 1$

[注意] 本質的に正五角形の作図可能性! □

[注意] $\omega = 5$, ± 1 かっ $\omega^5 - 1 = (\omega - 1)(\omega^4 + \omega^3 + \omega^2 + \omega + 1) = 0$ より, $\omega^4 + \omega^3 + \omega^2 + \omega + 1 = 0$, 問題 2-2(4)の結果より、 x4+x3+x2+メ+1 は Q上 既約 マタ項式である 問題3-1は本質的に「加減乗除と平方根のみを使って方程式メチャメチャメチリニのを解け」 という問題とみなされる

問題 3-1 解答例 $W=5_5=e^{2\pi i/5}$ とおく、 $W^5=1$, W+1 である.

条件 $W^4+W^3+W^2+W+1=0$, Re W>0, Im W>O で W は一意に特徴付けられる.

② $W + W^4 = d \times W \cdot W^4 = 1$ より、 $W \times W^4$ は 方程式 $\mu^2 - d\mu + 1 = 0$ の 解である。 Im W > 0 より、 $W = \frac{d + \sqrt{d^2 - 4}}{2} = \frac{d + \sqrt{4 - d^2} i}{2}$

これで、いは有理数から出発して、加減垂降と平方根をとる操作を有限回くりかえすことによって得られることがわかった。つまり、いは作図可能である。

|注意| 以上の方法はそのままらりの場合(問題3-2)にも使える。 □ 2次7程式を4回解いてられる成めることになる。

追記 問題3-1 は本質的に

4次方程式 X⁴+X³+X²+X+1=0を 2次方程式たちに 帰着して解け という問題に等しい、これを以下のようにして解くこともできる。

「 $\chi^4 + \chi^3 + \chi^2 + \chi + 1 = 0$ 」は「 $\chi + 0$ かつ $\chi^2 + \chi + 1 + \chi^{-1} + \chi^{-2} = 0$ 」と同値である。以下、 $\chi + 0$ と仮定する。

 $y = x + x^{-1} \xi x^{1} < \xi, \quad y^{2} = x^{2} + 2 + x^{-2} \zeta n \zeta,$

 $\chi^2 + \chi + 1 + \chi^{-1} + \chi^{-2} = 0$ は $y^2 + y - 1 = 0$ と同値である、

 $y=x+x^{-1}$ は $x^2-yx+1=0$ と同値である。

以上より、 $\chi^4 + \chi^3 + \chi^2 + \chi + 1 = 0$ の解法は,連立方程式

$$\begin{cases} y^{2} + y - 1 = 0 & -- 1 \\ \chi^{2} - y \chi + 1 = 0 & -- 2 \end{cases}$$

の解法に帰着できることかわかる、

①の解の全体は、
$$y = \frac{-1 \pm \sqrt{5}}{2}$$
.

yかい与えられたときの②の解の全体は、 $\chi = \frac{y \pm \sqrt{y^2-4}}{2}$.

$$y^{2}+y-1$$

$$y^{2}-4=-(y+3)=-\frac{5\pm\sqrt{5}}{2}$$

問題 3-2 517 か Q 上作 図可能なことを示せ、 □ ← かなり非自明、

で(これに関連した問題をすらと後にしか小課題に出す予定)

 $\{\psi_{\lambda}|_{C_{1}},\{\omega_{0},\omega_{1},...,\omega_{15}\}=\{\omega_{1},\omega^{2},...,\omega^{16}\}=\{z\in\mathbb{C}|1+z+z^{2}+...+z^{16}=0\}.$

ゆえに、do,d,は方程式 k2+K-4=0の解になる。

ゆえに、 xi, xi+4 は m2-pin+pi+1=0の解になる.

4 $\omega_{\lambda} + \omega_{\lambda+8} = \chi_{\lambda} \ \tau^{*} \wedge \tau^{*} \wedge \tau^{*} \omega_{\lambda} \omega_{\lambda+8} = 1 \ (\lambda=0,1,...,7).$ たとえは" $\omega_{0} \omega_{8} = \omega \cdot \omega^{1b} = \omega^{17} = 1.$ ゆ之に、 $\omega_{\lambda}, \omega_{\lambda+8}$ は $\omega^{2} - \chi_{\lambda} \omega_{\lambda} + 1 = 0$ の解になる.

以上によって、い。このも含む以の全体が有理数から出発して四則演算と二次方程式を解くことの有限回のくりかえして作られることがわかった。特にいは作回可能である。

注意 $\sigma(\omega) = \omega^3$, $\sigma(\alpha) = \alpha$ ($\alpha \in \mathbb{Q}$) をみたす体 $L = \mathbb{Q}(\omega)$ の自己同型 $\sigma(\alpha)$ 存在することを示せる、 (ヒント: $\mathbb{Q}(\omega^k) \cong \mathbb{Q}[x]/(1+x+\cdots+x^{16})$, k=1,2,...,16) このとき、 $\{\sigma^k(\omega)|k=0,1,...,15\} = \{\omega^k|k=1,2,...,16\} = \{z \in \mathbb{C}|1+z+\cdots+z^{16}=0\}$ で この集合は $\mathbb{Q}(\omega)$ の \mathbb{Q} 上での 基底に \mathbb{Q} る($1+x+\cdots+x^{16}$ の \mathbb{Q} 上での 験的性より). このことを使うと、前ページまでの計算を簡略化できる、

たとえば、 $W_k = \sigma^k(W)$, $d_k = \sum_{k=0}^7 \sigma^{2k+k}(W)$, $\sigma(d_k) = d_{k+1}$, $d_{k+2} = d_k$ より、 特に, $\sigma(d_0d_1) = \sigma(d_0)\sigma(d_1) = d_1d_0 = d_0d_1 \times \sigma$ の作用では、 d_0d_1 は不変になる、 d_0d_1 は W の べきたちの $8^2 = 64$ 個 9 和になるので

$$d_0d_1 = \sum_{k=0}^{15} C_k \sigma^k(\omega), \quad C_k \in \mathbb{Z}_{\geq 0}, \quad \sum_{k=0}^{15} C_k = 64$$

しかし、エレがントでない季朴な方法で、dod1=-4を示す経験も重要である。

 $Y_{k} = \sum_{\bar{\Lambda}=0}^{1} \sigma^{8\hat{\Lambda}+k}(\omega), \ \sigma(Y_{k}) = Y_{k+1}, \ Y_{k+8} = Y_{k} \perp 1, \ \sigma^{4}(Y_{k}Y_{k+4}) = Y_{k}Y_{k+4}.$

これに、かならか用させると、 8~8~4 = 月かり

 $W_0W_8 = W \cdot W^{1b} = W^{17} = 1$. これに C^{h} を作用させると、 $W_{k}W_{k+8} = 1$. 以上によって、前々ペーシ まで で略した計算 かずかて埋まった。 T

以上を見すぎてしまう前に自分で計算することを楽しんでほしいです! 特に数学を教える仕事に興味がある人は色々計算してあてとよい! 数学の研究でも素朴及計算が重要である!

解答例 分子分母に (1-5+5-256)(1+52-5-256)(1-52-5+256)をかけて, かんはって計算すると 分母か有理化される。

$$(1 + \sqrt{2} + \sqrt{3} + 2\sqrt{6})(1 - \sqrt{2} + \sqrt{3} - 2\sqrt{6})(1 + \sqrt{2} - \sqrt{3} - 2\sqrt{6})(1 - \sqrt{2} - \sqrt{3} + 2\sqrt{6}) = 376$$

$$(1 - \sqrt{2} + \sqrt{3} - 2\sqrt{6})(1 + \sqrt{2} - \sqrt{3} - 2\sqrt{6})(1 - \sqrt{2} - \sqrt{3} + 2\sqrt{6}) = -4 - 14\sqrt{2} - 16\sqrt{3} + 38\sqrt{6},$$

$$\frac{1}{1 + \sqrt{2} + \sqrt{3} + 2\sqrt{6}} = \frac{-4 - 14\sqrt{2} - 16\sqrt{3} + 38\sqrt{6}}{376} = -\frac{1}{94} - \frac{7}{188}\sqrt{2} - \frac{2}{47}\sqrt{3} + \frac{19}{188}\sqrt{6},$$

考之方 1+52+51+256 = 1+52+51+255 の 52, 51 を ± 52, ± 51 に かきかえて得られる 4つの数を かけあわせると 有理数 (この場合は整数) になる。このような観察が Galois 理論に至る道になっている。 1+52+51+255= (1+53)+(1+253)を ← これの分の1の分母からも消引には > 上と本質的に分子分母に (1+53)-(1+253)を かければよい、同様の方法で、「5も消せる。 コロコンになる。

注意 一般に

$$(\alpha + b \sqrt{m} + c \sqrt{n} + d \sqrt{m}n) (\alpha - b \sqrt{m} + c \sqrt{n} - d \sqrt{m}n)$$

$$= (\alpha + c \sqrt{n})^{2} - m (b + d \sqrt{n})^{2}$$

$$= \alpha^{2} - mb^{2} + nc^{2} - mnd^{2} + 2 (\alpha c - mbd) \sqrt{n}$$

$$= A \qquad = B$$

$$(A + b \sqrt{n} + c \sqrt{n} + d \sqrt{m}n) (\alpha - b \sqrt{m} + c \sqrt{n} - d \sqrt{m}n)$$

$$(A + B \sqrt{n})(A - B \sqrt{n}) = A^2 - n B^2.$$

以上の計算より、 $a,b,c,d,m,n \in Q$ のとき、

Q+b5m+c5n+d5m5nの中の5m,5nを2れでれ土5m,土5nであきかえてできる4つの数をかけあれせると有理数になることかれかる。

注意 L=Q(豆,豆)の体の自己同型の、てで の(豆)=-豆,の(豆)=豆, て(豆)=-豆, て(豆)=-豆, さみたすものかー 声に存在する、このようなの、てもうまく利用すること が Galois 理論になっている。 問題3-4 $a,b\in Q$, a+bと仮定する、 $Q(\sqrt{a},\sqrt{b})=Q(\sqrt{a}+\sqrt{b})$ を示せ、ここで、 $Q(\sqrt{a},\sqrt{b})$ は Q,\sqrt{a} , \sqrt{b} を含む C の部分体 で最小のものを表す、 \square

解答例

① Q(Ta, Tb) ⊃Q(Ta+Tb) を示えう。Q(Ta, Tb) は Qと Ta+Tb も含む、 Q(Ta+Tb) は Qと Ta+Tb も含む Cの最小の部分体なので、Q(Ta+Tb) ⊂ Q(Ta, Tb)、

② Q(坂, 瓜) C Q(坂+瓜) を示えう、 $\alpha + b + b$ 坂 $\pi + 1 \pi$ 場に $\pi + \pi + \pi + \pi$ なので、 $Q(\pi + \pi) \Rightarrow \frac{\alpha - b}{\sqrt{\alpha + \pi}} = \pi - \pi$,

$$Q(\sqrt{a+1b}) \Rightarrow \frac{(\sqrt{a+1b}) + (\sqrt{a-1b})}{2} = \sqrt{a}, \quad Q(\sqrt{a+1b}) = \sqrt{a}, \quad Q(\sqrt{a+1b}) = \sqrt{a}, \quad \sqrt{a}, \quad \sqrt{b} \neq \sqrt{a}.$$

Q(√a,√b)はQ,√a,√bさ含むCの最小の部分体なので、Q(√a,√b) CQ(√a+√b)、

以上によって、 $Q(\sqrt{a}, \sqrt{b}) = Q(\sqrt{a} + \sqrt{b})$ か示された、

問題 3-5 $d = \omega \sqrt[3]{7}$, $w = e^{2\pi i/3} = \frac{-1 + \sqrt{3}i}{2}$ $z_3 < 1$

- (1) [Q(4);Q] を求めよ、
- (3) [Q(X,W):Q]を求めよ、 \zofj:

んが体Kの拡大体のとき, (1) $L(k)(\alpha), k$ 」 $C(k)(\alpha)$ になめよ。 $[L:K] = [L/K] = d_{im} k L$ と書き、これを L/Kの拡大次数。

ドント」dのQ上での最小多項式はx3-7になる。W&Q(d).

解答例(1) $d = \omega^3\sqrt{1}$ は $\chi^3-7=0$ の解でかつ、 χ^3-7 は Q上既約なので、 X3-7はよのQ上での最小多項式になる(問題2-4の解答例を見よ), ゆえに、体の同型 Q(d) \cong Q[x]/(x3-7) (f(d) \leftrightarrow f(x) =(f(d) mod x²-7))を得る、 Q[X]/(x3-7)のQ上のベクトル空間としての基底として、1,x,x2の像をとれる、 特化, $\dim_{\Omega} Q(x)/(x^3-7)=3$, b λ 化, $[Q(x):Q]=\dim_{\Omega} Q(x)=3$ 、

~Q囚/(x³-7)の中で、ヌ³=7なのでヌの3乗以上の項は 又の2乗以下の項の和で書ける

- (2) $\omega \notin Q(A)$ であることを示えう。 (1) と同様にして。 $Q(35) \cong Q(X)/(x^3-7)$ なので; $Q(A) \cong Q(35)$ となる。もしも $\omega \in Q(A)$ ならは Q(35) も 1 の厚始 3 乗根 を 含むことになって矛盾する。 ゆえに、 $\omega \notin Q(A)$ である。 (注) $Q(A) \neq Q(35)$ かえた, $Q(A, \omega) = Q(A)(\omega)$ ⊋ Q(A) 。 $Q(A, \omega) : Q(A) > 1$. ω は $\chi^2 + \chi + 1 = 0$ の解になっているので; $[Q(A, \omega) : Q(A)] \le 2$. したかって, $[Q(A, \omega) : Q(A)] = 2$. ω ここれがって, $[Q(A, \omega) : Q(A)] = 2$. ω ここれがって, $[Q(A, \omega) : Q(A)] = 2$. ω ここれがって, $[Q(A, \omega) : Q(A)] = 2$. ω ここれがって, $[Q(A, \omega) : Q(A)] = 2$. ω ここれがって, $[Q(A, \omega) : Q(A)] = 2$. ω ここれがって, $[Q(A, \omega) : Q(A)] = 2$. ω ここれがって, $[Q(A, \omega) : Q(A)] = 2$.
- (3) $[Q(\lambda, \omega): Q] = [Q(\lambda, \omega): Q(\lambda)][Q(\lambda): Q] = 2.3 = 6.$

过多以上の議論を見直せば、

Q(d)のQ(d)上のベクトル空間としての基底として1,以かとれ, Q(d)のQ上のベクトル空間の基底として1, d, d²がとれ, Q(d, U)のQ上のベクトル空間の基底として,1,d, d², W, Wd, Wd²がとれることがかる。